

第VII章 結語

本報告では、平城京左京三条一坊一・二・八坪における発掘調査の成果を詳述した。とくに、一坪は朱雀門前に位置し重要な場所と予想していたが、その場所に平城宮・京造営期の鍛冶工房が設置されていたことがあきらかになった。その後、朱雀門前の広場として整備され奈良時代を通して利用されていたことが判明した。以下、本報告の内容を要約し、最後に今後の課題と本調査地の整備活用の状況についても言及したい。

1 検出した主要遺構

本調査地では、弥生時代、古墳時代、奈良時代、長岡京遷都後の時期の遺構が検出された。

八坪では、弥生時代第V様式の土器が出土した東西溝SD10420・10421を確認した。一坪の東南では古墳時代の土坑を1基、二坪北辺では6世紀前半頃の小規模円墳SZ10415とその周濠SD10416を確認した。

一坪の北半には、平城宮・京造営期の鍛冶工房群が展開していた。遺構の重複関係から前後2時期に分けられる。前半期の鍛冶工房SX10100は工房覆屋SB10250内に複数の炉・轍座・金床跡が設置され、工房周囲には防湿施設である斜行溝SD9883、東西溝9885、南北溝10260が設けられている。後半期の鍛冶工房SX9830・9690・9850は、それぞれ工房覆屋SB9881・9880・9882をともない、覆屋周囲には防湿施設である東西溝SD9878・9884・9885、斜行溝9883、区画溝9889が敷設されていた。工房覆屋内には炉・轍座・金床跡が規則的に配置されている。後半期鍛冶工房の南には付属建物の東西棟建物SB9877、南北棟建物9999・10000・10010が建ち並んでいた。また、一坪と二坪の間には、三条条間北小路SF9670とその南・北両側溝を検出した。後半期鍛冶工房群と小路は同時期に並存したと考えられる。

一坪の鍛冶工房は廃絶後に整地され、その整地土を掘り込む建物や井戸、坪内道路などが検出されている。平城京内最大ともいえる井戸SE9650は上下2段の井戸枠が残存していた。上段は1辺2.4mの規模で井戸屋形SB9890をともなう。下段は平面六角形で、横板7段で構築されていた。坪の中央には、東西方向の坪内道路SF9660が敷設され、南北に側溝をともない、西端は朱雀大路東側溝にかかる橋を渡り朱雀大路へと連結している。井戸SE9650の北と東、三条条間北小路の北には、小規模な掘立柱建物が複数棟みつかっており建て替えがみとめられた。また、広場内には地鎮祭祀にかかる土坑SK10050も検出された。一坪の東面は、遺構面が削平されており、築地塀の有無は不明だが、北・西・南面に築地塀はなく、一坪は朱雀門や二条大路と一体となり朱雀門前の広場として機能していたと考えられる。

長岡京遷都後と考えられる東西棟建物SB10075は、重複する遺構が少ないため具体的な造営時期、廃絶時期は不明である。坪内道路は、側溝の遺物から10世紀初頭まで存続していたことがあきらかになっている。

2 出土遺物

土 器 東西溝SD10420からは弥生時代第V様式の各種土器、古墳の周濠SD10416からは須恵器の杯H（MT15～TK10型式）が出土した。井戸SE9650埋土からまとまって出土した土師器、須恵器は奈良時代後半に位置付けられ、完形に近い土師器の甕と須恵器の壺瓶が多い。少数だが奈良三彩も出土している。

埴 輪 古墳の周濠SD10416のほか、奈良時代の整地土や三条条間北小路の北・南側溝SD9671・9672から出土している。円筒埴輪・朝顔形埴輪、各種の形象埴輪などがある。IV期（群）埴輪1点を除くほかはV期（群）埴輪である。

瓦 奈良時代の軒瓦、丸瓦、平瓦が出土したが、総量は調査面積に比して少ない。一坪で検出した掘立柱建物は総瓦葺きではなかったであろう。三条条間北小路の両側溝に集中して出土した瓦は、二坪北面築地壠の瓦が廃棄されたと考える。

木 簡 井戸SE9650から一坪と左京職との関わり、朱雀門を警護する衛門府との関連、井戸の埋め立ての祭祀を示唆する木簡が出土した。

木 器 井戸SE9650から多量の木器が出土した。祭祀具、服飾具、武器、遊戯具、工具、食事具、農具、容器などがある。このほか、草鞋や網代網みの籠なども出土した。

金属・石製品 鉄刀子、鉄釘、鉄斧、鉄鎌、銅錢の開元通寶、和同開珎、サヌカイトの石鎌、ガラスの臼玉などが出土している。

冶金関連遺物 平城宮・京造営期の鍛冶工房跡から、鉄釘の小片、土製の鞴の羽口、砥石、金床石のほか、鉄滓、鍛造剥片、粒状滓が出土した。鍛冶工房では鉄鍛冶のみをおこなっていた。

井戸部材 井戸SE9650の上段井戸枠土居桁には井戸構築に不要な仕口があり転用材であることを確認した。下段井戸枠横板には炭化部分や井戸部材に不要な釘穴が確認できるものがあり、転用材が混在している可能性を指摘した。

大型植物遺体 井戸SE9650埋土と東西溝SD10420・10421埋土出土の種実を分析した。井戸埋土にはクリ、ヤマモモ、ナツメ、モモ核、メロン仲間種子ほか、野生のナシ亜科など、食用植物が多くみられた。弥生時代の東西溝からは、イネ、アワ、ダイズなどの栽培植物のほか、周辺の植生を示すイヌタデや湿生から抽水植物のミクリ属やスゲ属、ナヤギタデなどが出土した。

3 自然科学分析

土壤分析 環境復元を目的として植物珪酸体、花粉、種実、寄生虫卵、珪藻の分析をおこなった。

井戸SE9650周辺は湿地的な環境であり、比較的乾燥したところも分布していた。森林植生として、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹、スギ、マツ属などの針葉樹が育成していた。寄生虫卵は低密度であるため、通常の生活汚染に由来するものと考えられる。井戸SE9650下段井戸枠掘方の周辺は、ヨシ属が生育する比較的湿潤な環境、カシ（コナラ属アカガシ亜属）を主とする森林と、草地、沼沢湿地の環境の分布が推定される。三条条間北小路SF9670北・南側溝は、井戸SE9650埋土周辺の復元植生との大き

な差異は認められない。珪藻がほとんど検出されないことから、降雨時にのみ雨水が流れるような乾湿を繰り返す環境であった可能性が考えられる。坪内道路SF9660北・南側溝は相対的には湿潤な環境であるが、雨水などが流れ、普段は湿った程度からやや乾燥した環境であったとみなされる。周辺は排水のよい乾燥した環境が復元される。

鍛冶関連遺物の理化学的分析 鍛冶工房から出土した鉄滓や鉄の微細遺物を分析した。7世紀後半～8世紀末の都城周辺における鍛冶工房には、製錬工程での不純物を除去後、鍛打成形された鉄素材が搬入されていたと考えられる。特に平城京左京三条一坊一坪の鍛冶工房では、規格化された製品の大量生産がおこなわれていた可能性が高いと想定した。同一遺構内に多数の鍛冶炉を併設して、各炉とも熱間での鍛打による製品製作（鍛打成形）を集中しておこない、規格の決まった建築金物を大量生産したと推測される。

出土部材および木簡・木製品の樹種 出土木材について樹種鑑定を実施した。木簡は柾目、板目のスギ、ヒノキ、下段井戸枠の横板は柾目、板目のヒノキを使用していた。井戸から出土した木製品は、ヒノキがほとんどだが、そのほか刀子の柄はカキノキ属、鳴鏑はヤマモガシ、横櫛はイスノキ、匙はツブラジイ、独楽はキンモクセイなどがあった。東西棟建物SB10000の柱根は強度の高いサカキであることが判明した。

年輪年代 井戸SE9650から出土した木簡、下段井戸枠の横板、曲物底板について、年輪年代学的検討を実施した。木簡3点は、年輪幅が一致したことから同一材に由来する可能性が高い。井戸枠横板F1は残存する辺材最外層年代が669年と井戸枠材の中では最も新しい値を示し、井戸枠材の伐採年は669年以降それほど経たない年代と解釈できる。奈良時代の井戸SE9650と669年という年代には隔たりがあるが、井戸枠材は転用材の可能性が指摘されていることを考えあわせると、整合的な年代と考える。曲物底板27は残存する辺材最外層年代が776年であり、この曲物はこの年以降に伐採・製作されたことから、井戸SE9650の廃絶時期は776年以降であり、奈良時代末頃まで降ると考えられる。

4 結 論

遺構の変遷および鍛冶工房の歴史的意義について、改めて本報告の結論をまとめておく。

一連の調査の結果、平城京左京三条一坊一・二・八坪の土地利用の変遷があきらかになった。八坪において弥生時代の集落の存在を示唆する溝、二坪では小規模古墳の存在を確認した。平城宮・京の造営工事にともない、一坪には大規模な鍛冶工房が設けられるが、和銅7年（714）内には翌年の元日朝賀にともなう儀式に供する広場へと整備された。長岡京遷都までは広場として存続し、その後は次第に田畠化して現在に至る。

平城宮・京造営期の鍛冶工房は、これまで発見されたなかで宮・京内最大規模の官営工房跡であり、工房の全体的な構成・構造だけでなく、作業単位を知ることができる貴重な遺構である。同工房は、小型鉄製品の製作のみをおこなった単一業種の工房であり、7世紀において複数の業種を総合的に担う大規模協業体制から、業種が分化し単一化する単細胞型大規模協業組織を編成する変遷過程をたどることのできる重要な調査例として位置付けられる。

和銅7年内には完成していたと想定する朱雀門前の広場は、朱雀大路、二条大路と左・右京

の一坪をあわせた空間で、その規模は南北約140m、東西約260mに復元できる。一坪内には、井戸と儀式に関連する建物が存在していた。この広場では、和銅8年正月の元日朝賀のほか、歌垣、相撲、獣騎・射騎、大祓、大饗等の儀式がおこなわれたと考える。しかし、広場には朱雀大路側溝が存在し、左・右京の一坪は、朱雀大路とは区別された空間であり、一坪は儀式をおこなう際のバックヤード的な空間として機能した可能性もある。この広場は、左・右京職の管理下にあり、長岡京遷都時まで維持されていたと考えられる。

5 今後の課題

一坪の鍛冶工房群は、平城京内で初めて確認できた大規模官営工房の遺構である。その位置や規模、構造から、平城宮の造営に関わる工房であった可能性は高い。しかし、平城宮の造営には、さらに多様な業種の工房が不可欠であり、それらは宮の近辺にも存在したはずである。今後、こうした各種の工房遺構があきらかになることによって、平城宮の造営過程、工房を管理する官司や操業体制が明確になるであろう。新たな調査の進展に期したい。

本調査では、左京の一坪における広場の様相があきらかになったが、右京三条一坊一坪は部分的な調査に留まっており、同坪における鍛冶工房の存在を示す遺構は確認していない。坪内道路は同坪にも存在したが、井戸や建物の有無は未詳である。本報告で想定したように、朱雀門前の広場が完全に左右対称の構造であったかどうかは、将来の調査を待ちたい。また、左・右京一坪周辺の既調査成果を総合し、朱雀大路、二条大路など平城京内主要道路の造営計画、造営時期とその変遷など、朱雀門前的重要地における空間利用の具体像を解明する必要がある。

井戸SE9650からは土器、木器、木簡などさまざまな遺物が出土した。これらは井戸廃絶時の遺物と考えられ、井戸の廃絶時期を示す根拠となった。一方で、広場である一坪は、土器や木器などを日常的に使用する場ではないため、これらの遺物の由来や性格を解明する必要がある。隣接する坪との関係、井戸埋め立て時の祭祀との関連などの検討は今後の課題としたい。

6 復原整備と活用

調査終了後の本調査地およびその周辺は、国土交通省および奈良県により、国営平城宮跡歴史公園「朱雀門ひろば」として大規模な復原整備がおこなわれた。「朱雀門ひろば」は朱雀門、平城宮いざない館、朱雀大路、二条大路、観光交流施設からなる。

平城宮いざない館 発掘調査の契機ともなった平城宮跡を概説するための施設で平成30年(2018)3月24日に開館した。同館は、平城宮跡管理センターが運営しており、無料で見学できる施設となっている。館内には、4つの展示室を設けている。

「平城宮跡のいま」：平城宮跡の全体像と四季を彩る豊かな自然、平城宮内の復原工事情報などを解説。

「平城宮のようす」：平城宮全域の復原模型(1:200)やCG映像、平城宮一日絵巻などを公開。

「往時のいとなみ」：平城京左京三条一坊一坪の鍛冶工房の様子を再現したジオラマを展示する。このほか、第一次大極殿の復原模型(1:5)があり、建物の組物、瓦葺き、木簡文書

づくりなどが体験できる。

「時を越えて」：この展示室は、奈文研が主体的に企画した。長年にわたり実施したきた発掘調査の中から遺跡・遺物を厳選し、平城宮・京の歴史を解説する。一坪の鍛冶工房出土品も展示している。

井戸SE9650の実物展示 館内の中央通路に保存処理を施した井戸枠の部材を組み上げて展示している。展示の位置は井戸の検出箇所にあわせた（図146）。

朱雀大路・二条大路 國土交通省が平城宮いざない館の開館にあわせて、朱雀大路および二条大路の復原整備を実施した。朱雀大路は朱雀門から大宮通りまでの長さ約260m分、二条大路は朱雀門の左右あわせて長さ約400m分を再整備した。既存の復原整備施設のほかに、朱雀大路西側溝、側溝を渡る橋、二条大路を横断する溝など発掘調査であきらかになった最新成果を新たに追加復原し、街路樹の植栽などもあわせて各種の整備を実施した。今回の復原整備で朱雀大路の全幅を実感できるようになった意義は大きい。

観光交流施設 右京三条一坊一・二坪には、奈良県によって観光案内施設および飲食施設、復原遣唐使船ほか、有料駐車場、バス停留所などが併設され、奈良観光の拠点の一つとして位置づけられた。

以上、朱雀門前の現状に関する情報は平城宮跡歴史公園HPを参照せられたい。



図146 井戸の展示（平城宮いざない館）